慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松野賢吾訳 レプケ財政学
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.11 (1939. 11) ,p.1497(91)- 1504(98)
JaLC DOI	10.14991/001.19391101-0091
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19391101-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

松野賢吾譯「レプケ財政學」

永田清

一

私は財政學の入門的參考文獻を求められる毎に、その一つとして Röpke の Finanzwissenschaft を擧げて來た。その理由は、第一にこの書が僅々百五十頁の裡に、財政學の主なる問題を包括してゐるからである。財政學の概論書は由來浩瀚なものが多い。といふのは、十九世紀後半において財政學の體系が完成し、その體系たるや、一方において財政學の自己獨立性を完了すると共に、他方において財政理論、財政制度並びに財政技術を含む廣汎な領域に亙るものとなり、然もこの體系はその後不動のものとして發展し、その結果はいよ〳〵以て叙述の精緻と說明の複雜とを加へたからである。さうして財政學の理論的反省及びその新たな解明は寧ろ後退した憾があつた。併し斯る後退は勿論そのまゝに放置さるべき事柄ではない。そこで體系の整序は要求された。その整序の一つの試みとして、レプケのこの書は極めて重要な文獻である。

第二に私が本書を推薦する理由は、レプケの注意が全篇に亙つて常に新たな問題にむけられてゐることである。財政は一般に吾々の經濟生活から遠い事のやうに思はれてゐる。けれども事實は全くこれと反對で、國民經濟の立

場から言つても、また吾々の日常生活からみても、財政が國民的な重大關心事であることは異論がない。されば經濟機構上に問題となることは、直ちに財政學の問題として採り容れられねばならぬ。そこに財政學の眞の擴充があつた筈である。それにも拘らず、財政學の多くの參考文獻が從來の體系に固執して、新たな問題をとり込まうとしなかつたことは、悲しむべき傳統であつた。併し曩にも述べたやうに、財政の現實的重要性はこの傳統を打破するべく充分な成熟を遂げつゝあつた。その一階梯として、私はレプケの財政學に異常の興味を覺えるものである。即ちこの財政學は舊殼からの蟬脫の試みとして、謂はゞ古き革袋に新しき酒を盛らうとしてゐる。

この方法は財政學の一般理論を敎へやうとする場合には極めて有效な仕方である。蓋し概論書においては、讀者の理解を容易ならしめるために、一定の筋道をたてゝ說明する必要があり、徒らに奇を好んで異說を强調する態度は極力避けらるべきだからである。翻つて想へば、十九世紀の財政學體系には、それ相當の理由があつた。それが次第に止揚さるべき必要は財政現象の新たな階梯が生起したからである。さうすると、この轉移の過程は舊體系の淸算ではなくて、その整序によつてみたさるべきである。無論財政現象のいくつかのものについては、今日ではこれを全然新しい角度から解釋さるべき必要がある。併しその點のみを强調して、全體の觀點を混亂せしめることは、財政學の一般論としては、充分に警戒さるべき事柄である。從つてこの場合、出來るだけ從來の研究者の業績を利用して、その肩の上に乘つて進むことが心掛けられねばならぬ。この點において、レプケの財政學はその任務を充分に果たしてゐる。

第三にこの書は財政學の概說書としては意外に面白く書かれてゐる。勿論叙述の面白さは、決して書物の理論的價値を決定するものではない。寧ろそのために、說明の重要な部分が外れて、理論の素通りになる危險が多い。殊に財政學の如く、その政治的性格の强い社會科學の一部門では、理論が政治に對する一片の皮肉として流產することは、吾々の屢々經驗するところである。併し思ふに財政學は今日まで餘りにも無味乾燥な科學として發展して來た。何故にさうなつたか。――その理由は姑く問はずとするも、兎に角財政學がもつと一般に興味あるやうに說かれたならば、その進步と學問的關心とは一層高揚せられたであらう。

總じて財政學は租稅法規の叢林に模索すること多く、また數字の羅列に墮することが甚だしかつた。更にこれより脫出するとすれば、徒らにその理論的思考過程を煩雜ならしめて、讀者に脅威を與へるが如き傾向をもつた。言ふまでもなくこれ等は共に財政學の興味を殺ぐ結果となつたのである。從つてこの倦怠より財政學を解放することは、今日の財政學者にとつて一つの課題でなければならぬ。レプケはこの課題を擔つて「習俗的な敎科書の因襲より遠ざからんとする個人的な野心」をこの書の裡に盛り込んでゐる。

二

そのレプケの財政學が松野敎授によつて邦譯された。斯くて近代財政學の緖口はひろく讀まれる機會を得たのである。以下本書の內容を紹介して、二三の批評を附け加へよう。

本書の特徵は、財政と經濟との關聯を明らかにする點にある。この點を著者は再三說いてゐる。例へばその序文の中で、「財政學敎科書に從來行はれたよりもより强く經濟的關聯を强調せんとした」（邦譯原著者序、一頁）と述べ、また總論の緖言では、財政學の概念規定に關聯して次の如く說いてゐる。――

「財政と國民經濟の全過程――この全過程の中で財政經濟はその重要性を次第に增大し來り、今日漸次優位を占むるに至つた――との絕えざる關聯は重大にして、社會經濟學者の財政學的問題への興味を先づ第一に惹起せしむる

所のものである。國民經濟の狀態と進轉とが國家の收支に如何なる作用を及ぼすや？　反對に國家の收支が國民經濟の全過程に如何なる影響を及ぼすや？　是等の問題並に是に類する問題の取扱こそは、本來社會經濟學的なる內容を始めて財政學に貸與し、財政法並に財政技術なる相近似する二部門に相對して、財政學に獨立の地位を與へるものである。斯くする事に因りて始めて財政學はより廣き意義に於ける國民經濟學の一部門――全く重要なる一部門――に外ならざるものと看らる可き事が明らかとなる」と（邦譯三頁）。

斯かる根本的觀點よりすれば、財政學全體の體系も自らにして經濟的關聯の意味を强化するやうに整序される。併し著者は「理論の理解を不可能ならしめる」ことを虞れて、財政事實の叙述においては、多く舊來の傳說を守つてゐる。けれども彼れがこの傳統の裡に、新たな內容を盛つたことについては、曩に述べた通りである。從つて吾々はこの書を通じて、從來の財政學が內容として充分に整序されてゐることを識らねばならぬ。

本書は總論と國家收入論とに分れる。この分け方は一見するところ、收入論を偏重するところのルロア・ボオリュウ、カイツルの體系にも似てゐるが、事實はさうでない。レプケは唯だ說明の簡略のために、豫算論と經費論とを總論の中に含めて論じてゐるのである。即ち總論は五章に分れる。第一章に緖言として、財政學の概念、本質、任務並に重要性を說き、更に財政學の分科、方法及び限界に關說し、尙ほ財政學發展の跡を略說してゐる。この章で特に注意すべき點は、財政の經濟的關聯性の究明であること前述した如くであるが、も一つ附け加へておけば、財政が總ての時代に於いて「政治の解決者」であることを明らかにしてゐる點である。「財政問題こそは一七八九年の佛蘭西大革命の如き革命、又は世界史上是に劣らざる意義を有する北米合衆國の獨立宣言の如き結果を齎らした。國家の併合・隷屬・割讓は屢々財政問題に因りて決せられ來つた。國家は誤れる財政行爲によりて滅亡し、或は巧妙なる財政々策に因りて興隆し來つた。多くの內政問題は結局財政問題に於て其頂點に達すること、豫算討論は貨幣に表現せられたる政治計劃に關するもの以外に存せざること」を示した點は、財政の重要性を意識せしめずには措かない。併しこの事實の明示を超えて、更に現實財政々策の理論的目標を與へてくれることが一層望ましかつた。問題の重要さに驚くことは、次にその解決策の目標を要求せしめるからである。

第二章は專ら財政史にあてられてゐる。財政史の時代上の區分は、古くはツグナア、シュタインにより、近くはロッツ、シュティリッヒによつて樣々に說かれてゐるが、その說くところ大同小異であつて、今こゝに一々紹介する必要もない。レプケが封建主義、專制主義並に自由主義の各時代に分けたことは、略々通說を採用したものと言つて好い。尙ほこの一般史の外に、著者がこの章で世界戰爭前の獨逸、大戰中の獨・英・佛の財政及び戰後の獨逸財政を述べたことは、獨逸に偏すること多いとしても、歷史進展のあとを示して興味がある。

第三章では財政に關する若干の基本問題が論ぜられてゐる。この若干問題といふのは、財政の本質、國民經濟全過程の領域に於ける財政、私經濟と財政、財政の限界、一國租稅給付能力の諸問題を含んでゐる。この章は全篇の中で最も注意さるべきところであり、著者の說明また精彩を放つ部分である。殊に財政と經濟的總體過程と財政との問題については、著者の考案になる圖表が示され、この點の理解を容易ならしめるための努力が拂はれてゐる。尙ほ末節の租稅給付能力についての考察も、常に之を國民經濟の實體に關聯せしむべきことが明らかにされ、從來の形式的解釋は克服されてゐる。

三

第四章に財政の秩序たる豫算論を揭げる。本來豫算論は獨立の一篇をなすべきであるが、著者は便宜上これを經

費論と共に總論の篇に擧げた。それは別に理由があるわけではなく、唯だ出來るだけ簡明に財政學の全體を說明せんとした著者本來の意圖によるところである。豫算は財政全體の秩序を示すものであるが、各時代の政治的壓力のために、その秩序が必ずしも達せられないことは注目すべき事柄であらう。社會の變革過程は實に斯かる混亂の裡に芽生えて來る。レプケはこの章の第二節財政の實質的秩序に於いて、この問題を取りあげ、「大藏大臣は自分自身並に莫大なる費用を要する政治政策を不評判ならしめざるために、後世にノアの大洪水ありとの原則を守りつゝ目前の便益を擇ぶ」と言つてゐるのは示唆多き言葉である。

第五章國家經費論。――財政學上に於ける國家經費論の地位は屢々問題とされるが、著者はこの點について次の如く說いてゐる。

「國家經費の取扱が畢竟財政學の任務の範圍に屬するや否やは、財政學者の間に於て尙未だ意見の一致を見ざる所であり、然かも夫にも拘らず、國家の經費と收入との間には、裂き難き科學的關聯の存するものとの確信が、次第に血路を開くに至れる事は旣に述べたる所である。而して殊に吾人の如く、財政學の任務を以て、國家經濟と經濟生活との交互作用に注目する獨特なる國民經濟學的任務なりとなす者は、特に國家經費の根本的分析は之を避くるを得ない。此場合吾人は勿論理論經濟學に於ける消費の取扱の如く、非科學的價値判斷をなさゞるやう注意するを要する」（邦譯八五頁）と。著者の立場はこれによつて旣に分明である。尙ほ著者はこの章で、國家經費の發展と原則とを說き、更にその國民經濟的作用を論ずる。以上が本書の總論の篇に含まれる內容である。

次に第二篇として國家收入論が說かれる。著者によれば、以上の總論の部は財政學上重要であるが、またそれと同時に、「國家收入論は財政學に於ける基本的にして主要なる學題たること、宛かも理論經濟學に於ける生產論や所得論の如くである」（邦譯一〇五）。從つて彼れは收入の概說を述べて、これを本源的收入と派生的收入との二つに分ける。本源的收入とは、一般に營利收入、私經濟收入と稱せられるものである。「國家は自ら經濟的全過程に入り來り、市場を通じて所得形成に參加し、費用以上の餘剩を供する所の報償と引換へに、商品又は給付を販賣することによつて本源的收入を獲得する」（邦譯一〇九）。この本源的收入はまた官業並に官有財產收入として論ぜられる部分である。これに反し、「派生的收入は國家が市場的（經濟的）なる所得形成以外に、旣に形成せられたる所得よりの派生に因りて獲得する所の收入である」（邦譯一〇九―一一〇頁）。その中には、公課、インフレーション・公債の三收入が含まれてゐる。

さて本源的收入については、企業者國家の問題が包攝せられる筈である。寧ろこの問題を主軸とするのでなければ、現實の新たな財政事實に近づくことが出來ない。著者もこの點についての着想は用意してゐる。―曰く「最近時に於ける國家の收益財產は又再び著しく增加するに至つた。此れは就中、現代交通機關の所有又は經營に對し、各國家が何れも參加する事が確立せられたるに基き、或は最も多くの方面、特に各種の社會主義によりて促進せられたる國有化並に社會化思想の來襲に基くものである。斯かる思想は此處に討究せんとする問題に於て特に考察すべき新しき方面を供するものである」（邦譯一一三頁）と。併しこの着想はこれ以上に稔つて居らぬ。その理由はこの書の書かれた年が世界恐慌前の一九二六年である爲めでもあらうが、問題が重要であるだけに、そのまゝでは如何にも物足りない。

次に此篇の國家の派生的收入は依然として「財政學の凡ての說明中の主要部分と見られる」から、稍々詳細に說かれてゐる。公課の外に、インフレーション收入を附け加へたことと、租稅の一般的原則の一つとしての公正原則に、

松野賢吾譯「レプケ財政學」

「公正――麗しき言葉ではあるが、何人が之を正しく解するか」（エグモントよりの引用）の痛烈な批判を浴びせたのは興味がある。唯だ私はインフレーション現象を貨幣政策的收入として論ずることよりも、公債との關聯において考察する方が一層論理的ではないかと思ふ。と言ふのは、確かに過去においては貨幣政策的なインフレーション收入が企圖されたのであるが、それは寧ろ特殊の事例であつて、多くは公債と結びついて發現してゐる。事實レプケも亦公債の問題を論ずるときに、常にインフレーション現象に關說してゐるのである。それならば、はじめからインフレーションを公債と關聯せしめて論ずる方が遙かに論理的である。今日のインフレーションを直ちに歷史上にみた超インフレーションに關聯せしめることは、寧ろ論理の分裂を來たす虞れがある。

それにも拘らずレプケの財政學は、その簡明なる點において、また新たな諸問題を內包する點において、今日最上の財政學概論と稱されて好い。無論いくつかの點において批判さるべきところはある。然しその批判は多く最近の急速な財政現象の發展から生じたものである。從つて吾々は一應この書によつて財政學の新たな緖口を學び、更にその後の發展によつて、近時の財政の新たな理解をもつことが出來る。斯樣な意味で、私はこの書を單なる入門書といふ以上に、ひろく現代財政學建設のための出發點とされんことを望むものである。重ねて譯者の勞を多とし度い。

井上芳郎著「支那原始社會形態」

野村兼太郎

支那事變以來、われわれの支那に關する關心は著しく增大した。元來隣邦支那についての研究は確かにわれわれ日本人に依つて當然なさるべき課題であつた。然るに從來西洋の學問文物にのみ多くの價値を認め、これに沒頭してゐたため、一般に支那については無關心に過ぎたといつても過言ではない。今次事變に依つて一般が支那に目ざめて來たことは、假令遲しといへども、惡いことではない。むしろ助長すべき傾向である。しかし眞に支那を理解することは一朝一夕になされ得ることではない。眞面目な、辛棒づよい努力に依つてのみ成就し得ることである。

「支那原始社會形態」の著者井上氏は東洋古代社會、殊にシュメル、バビロンの楔形文字等に依る古代原典の研究者として知られたる篤學の士である。支那事變に刺戟されて、倉皇として支那に關する知識を補綴して、時好に投ぜんとしたものではない。古代支那文獻に關する十數年の研究の成果である。この點において、私は本書を讀み、又これを進んで批評せんと欲する者である。私自身も年來支那の社會經濟史、思想史等に多大の關心を有する者である。唯不幸にして未だこの方面に關する研究に積極的に從事する餘裕をもたない。從つて評者としての資格を缺く者である。それにも拘らず敢てここに批評を試みんとするのは、本書が眞面目な研究の成果であることを知るが